

ワークショップ報告

—討議民主主義の実験と実践—

Chigasaki's Trial and Practice in Deliberative Democracy: A Report of the Citizens' Deliberation

山田修嗣¹、鈴木恭裕²、沢田宣夫²
Shuji YAMADA Yasuhiro SUZUKI Nobuo SAWADA

1. 茅ヶ崎市市民討議会報告の目的

本稿は、2009年10月31日（土）、11月1日（日）の2日間で行われた「茅ヶ崎市市民討議会」の開催記録である。市民討議会実行委員会がどのような意図を持って討議会を開催したか、参加者がどのように討議を行い、どのような感想を持ったかなどを実行委員の3人でまとめた。

2. 市民討議会「参加者」の実際と当日の運営

2-1. 討議「参加者」の無作為抽出

市民討議会のルールにもとづき、無作為抽出で選ばれる対象者は、「年齢20歳以上の茅ヶ崎市内在住者」と設定した。茅ヶ崎市の人口（233,928人）から、住民基本台帳をもとに当選者800人を抽出した。そして、当選者には招待状を郵送し、返信を待つことで市民討議会の「参加者」を募った。この時、「抽出者800人」の抽出条件に「年齢」を加え、「20～34歳」、「35～49歳」、「50～64歳」、「65歳以上」からそれぞれ200人ずつとした。その結果、「返信数」315通で、「参加承諾者」は86名にのぼり、承諾率は10%を越えた。「承諾者」の「性別」は「男性」が48人、「女性」が38人で、「年齢構成」は「20～34歳」が11人、「35～49歳」が20人、「50～64歳」が29人、「65歳以上」は26人であった。

次に「参加承諾者」の中から討議メンバーを選ぶための抽選を行い、「当日参加者」を選出した。市民討議会は6つのグループに6人ずつ、計36人でグループ討議を行うよう設定したためである。承諾者86人からの抽選は、一般市民への「公開抽選会」という形で開催された。ただし、「公開抽選会」までに「辞退者」が出たため「承諾者」82人からの抽選となった。その後、さらに1人「辞退者」が出たため、「参加者」は35人となった。この「公開抽選会」後の「当選者」の属性については、「性別」では「男性」19人、「女性」16人となり、年齢構成は「20～34歳」が7人、「35～49歳」が10人、「50～64歳」が9人、「65歳以上」が9人という結果となった。こうして市民討議会「参加者」が決定した。その後、市民討議会当日までに「辞退者」はさらに3人、討議2日目に「早退者」1人となり、最終討議の際の人数は31人であった。

2-2. 事前アンケート結果にもとづく参加者の属性及び動機

市民討議会参加者の「属性」、「参加動機」、「地域への参加目線」については事前アンケートで調査

1 文教大学湘南総合研究所市民討議会専門協力委員会・文教大学国際学部（本章1、5、6担当）

2 文教大学湘南総合研究所市民討議会専門協力委員会・文教大学大学院国際協力学研究科（同2、3、4担当）

した。

まず参加者の「属性」をみると、「職業」で多かったのが「事務職」、「家事専業」であり、次いで「自営業・経営者」、「販売サービス職」、「パート・アルバイト」、「専門技術職」、「公務員・団体職員」であった。「家族形態」については、「親世代と同居」が多く、次いで「夫婦のみ」、「未婚の子どもと同居」、「単身」、「三世代以上が同居」、「既婚の子どもと同居」であった。「住居形態」については、「持ち家（戸建）」が多く、次いで「集合住宅（戸建）」「借家（戸建）」であった。「市内での居住年数」については、「20年以上」が多く、次いで「生まれてからずっと」、「1年～5年未満」、「10年～20年未満」、「5年～10年未満」の順であった。「茅ヶ崎での安住の意向」については、「住み続けたい」という意向が最も多く、次いで「わからない」、「できれば住み続けたい」という意向で、「転出したい」という意向は見られなかった。「平日の平均在宅時間（睡眠時間を除く）」については、「4～7時間未満」が最も多く、次いで「12時間以上」、「7～12時間未満」、「2～4時間未満」、「2時間未満」であった。「年齢」については、「40歳代」、「60歳代」、「70歳代」が同一で最も多く、次いで「30歳代」、「50歳代」そして「20歳代」であった。また「地域構成」としては、「海岸地区」が最も多く、次いで「湘北地区」、「鶴嶺東地区」、「松浪地区」、「茅ヶ崎地区」、「鶴嶺西地区」、「小和田地区」、「松林地区」、「小出地区」であった。

次に「参加動機」にかんする問いでは、「市民討議会の手紙（参加依頼）が届いて、どのように感じたか」に対して、「面白そう」という答えが最も多く、次いで「実際に何をするのか不安」、「新しいとりくみへの期待」、「良いとりくみ」、「選ばれてよかった」であり「なぜ討議をするのか不明」という回答もあった。「市民討議会への参加を決意した理由」については、「選ばれたからには参加しようと思った」が最も多く、次いで「市民の役割として大切だと思った」、「討議会が興味深かった」、「日程的に都合がよかった」、「市のための協力したかった」、「新しいことにチャレンジしたかった」、「市から手紙が届き参加しなければならなかった」、「日頃から市に言いたいことがあった」であった。「謝礼の有無と参加決意の関係」については、「不要だと思った（謝礼がなくても参加した）」が最も多く、次いで「どちらとも言えない」、「必要だと思った（謝礼がなければ参加しなかった）」であった。「謝礼金額」については、「妥当であった」が最も多く、次いで「多いと思った」という意見もあったが、少数であるが「少ないと思った」という意見もあった。

最後に「地域への参加目線」では、「これまで参加したことのある活動」について質問したところ、「自治会活動（子供会、自治会の運動会や行事等も含む）」が最も多く、次いで「地域の清掃活動」、「地域のお祭り」、「PTA活動」、「NPO・市民団体の活動」とあり、「参加したことがない」という回答も市民討議会「参加者」の3割程存在した。また「市政への参加」、「行政との協働」にも関わった参加者もいる。「地域活動への参加状況」については、「求められれば参加している」が最も多く、次いで「時間や暇がないため参加していない」、「自ら進んで参加している」、「地域活動は面倒なので参加していない」、「必要性や興味を感じないので参加していない」であった。討議前の「これからの地域活動への参加についての意見」としては、「時間や暇があれば参加したい」が最も多く、次いで「求められれば参加したい」、「積極的に関わりたい」、「なるべく関わりたくない」という意見もあった。「地域の状況と個人の生活の関係」についての意見は、「良好な地域づくりは個人の生活の基盤である」が最も多く、次いで「生活が良くなるのであれば地域について考えたい」「地域社会と私の生活をつなぎとめる拠点が必要」であった。「『市民参加』という言葉に対する印象」については、「誰もが普通に行うべきこと」が最も多く、次いで「今後必要となること」「今の社会の前提条件である」があり、「一部の人が行っていること」という意見もあった。

3. 市民討議会当日の運営

2日間にわたる市民討議会当日のプログラムについては、図表1に記した。ただし当日は各々の討議においてあらかじめ設定した時間内に討議が終了しないグループがあるなど、日程に若干の違いも生じている。また、今回の市民討議会は公開討議とされ、傍聴者の参加も認められた。

図表1

10月31日（土）		11月1日（日）	
13:00	開会・挨拶	10:00	開会
13:25	アイスブレーキング	10:10	情報提供②
13:50	情報提供①	10:50	討議②（60分） 内容：「協働事業の必要性とその現状について」
14:30	討議①（60分） 内容：「ご近所の様子やつきあいの変化について」	11:50	昼食
		14:10	情報提供③
		14:45	討議③（60分） 内容：「これからの茅ヶ崎について」
		16:50	まとめ・主催者挨拶
		17:00	閉会

市民討議会の円滑な進行のための取組みとして、主に以下の3点を実施した。

まず第1に、6つのグループの討議内容を記録するため、文教大生が書記を担当して、参加者が討議に集中できるようにした。学生書記の役割としては、討議の内容を付箋に「キーワード」として書き込み、用意された模造紙に出された「キーワード」同士の関連性を考慮しながら整理していく方法とした。模造紙は3分割されており、「作業スペース」、「10個のキーワード集約」、「3個のキーワード集約」と出された意見を集約しやすいように工夫した。

第2に、各グループに討議の「参加者」による「グループリーダー」を設置した。「グループリーダー」の決定方法は、まず「参加者」が来場の際にあらかじめ「A～F」までのアルファベットが記載された紙を受け取り、テーブルに表記してあるアルファベットと同じ場所に座ってもらう。そして「リーダー決め」の際に、司会者がアルファベットの文字を発表することで「グループリーダー」が決定する仕組みだ。

第3に、討議前に簡単なクイズを行った。これは、「参加者」の緊張感をほぐす「アイスブレーキング」である。内容としては、「参加者」に全10問の○×クイズをしてもらい、リラックスした雰囲気を作って討議の前段階の準備を行った。また、○×クイズの内容は、「個人で答える」項目が6問と「グループごとで答える」項目が4問で構成した。

以上が市民討議会の進行のために実施した主な取組みであり、これらの点を踏まえ上記のプログラムに従って市民討議会を実施した。

4. 当日の討議と運営

4-1. 討議1：地域の満足度に関して

1回目の討議テーマは、「ご近所の様子やつきあい（人間関係）の変化について」であった。各グループでの討議の前に、討議テーマに沿って、茅ヶ崎市民活動サポートセンターの益永律子氏（茅ヶ崎市民討議会2009実行委員）が「ご近所の底力」という題で情報提供をした。

情報提供として、5つの具体例を挙げながら説明して下さったが、共通するのは、「人々のかかわりの重要性」についてであった。5つの具体例とは、「向こう三軒両隣」、「近所付き合い」、「井戸端会議」、「回覧板」、「共同募金」についてである。身近な近所付き合いや地域との関わりが希薄化してしまうと、たとえルールを守りたくても、情報が届いてこないため、ルールがわからず、結果的にルールを破ってしまいかねないといった説明をもとに、近所付き合いや社会への参加・付き合いの重要性についてわかりやすく指摘したものであった。

情報提供終了後、参加者は討議テーマをもとに、ディスカッションのヒント³を役立てながら話し合いに入った。そして、あなたの地域の満足いく点、または不満を感じる点について、ファシリテーターの進行によってグループの報告をまとめた。具体的に1つのグループに焦点を置き、討議の進行の一部を追ってみると次の通りだ。

まずは、ご近所付き合いなどの今と昔について意見を出していった。それにより、昔は、お葬式の集まりや地域の手伝いなどが日常茶飯事だったが、今は一軒一軒の孤立や子供の交流がなくなってきたということがわかった。交流がなくなった理由としては、核家族化や時間の制約、仕事での付き合いの方が住んでいる地域よりも強いのではないかという意見が出た。また、ご近所付き合いがない方が楽だという意見も挙げられた。

次に、これらの意見をもとに、地域の満足いく点、不満や不足を感じる点について意見を抽出した。その結果、人と人との関わりではなく、メディアから情報を得ていたり、顔が見えない関係になってきているので、情報が伝わりにくくなっていたりしているという不満や不足点が指摘された。

討議の残り時間が20分になった時点で、今までの討議内容からグループで「コミュニケーションの場」、「個人を尊重する」、「情報をどこから得るか」、「助け合い」、「時間の制約」、「1人の市民はたくさん地域と関わっている」、「市民がみな違う方向を見ている」、「生活に必要な施設がない」、「自転車の駐輪場が適切でない」という10個のキーワードを抽出した。

最後に、討議の残り時間が10分になった時点で、10個のキーワードをもとに、グループの意見として、「個人がバラバラ」、「グループのわずらわしさ」、「場所がない」の3つを挙げ、討議をまとめた。討議終了後、各グループのリーダーが発表を行った。発表終了後には、参加者それぞれが持っている3ポイントを、各グループの模造紙を閲覧しながら、共感できる発表に自由に投票した。それぞれグループの発表内容と投票結果については図表2で表した。

3 ディスカッションのヒントは、討議1から討議3まで、それぞれ討議の進行における補助的な役割として作成し、当日に配布をした。



討議1の発表前の模造紙



討議風景

図表2； 討議1における各グループの発表内容の一覧

グループ番号	各グループの発表内容	ポイント	%
1	個人のバラバラ、グループのわずらわしさ、場所がない	350	15.6%
2	地域によって異なる、なかなか時間がない、市民参加したくても情報が得られない	430	19.2%
3	ご近所付き合いこそ重要	430	19.2%
4	年代によっても、地域によっても異なる	275	12.2%
5	地域によって状況が様々、住みやすいまちにしたい、活性化が必要	400	17.8%
6	積極的な行動が必要、災害時の安心感、ものづくりが必要	360	16.0%
	計	2245	100%

初日の討議は、このような流れで終了した。2日目の討議のグループは、メンバーの固定がなるべくないよう、討議ごとにシャッフルをした⁴。

4 篠藤（2009，79ページ）にもとづき、討議ごとにメンバーの入れ替えを行った。

4-2. 討議2：協働への関わりに関して

2回目の討議のテーマは、「協働事業の必要性とその現状について」であった。茅ヶ崎市役所総務部市民活動推進課の熊澤克彦氏（茅ヶ崎市市民討議会2009実行委員）が、VTRなどの視覚資料を活用して、情報提供をした。

情報提供の内容は、協働と協働推進事業の定義とその具体例についてであった。「協働」とは、「同じ目的のために、対等の立場で協力して共に働くこと」であり、身近な例では、「一人ではできないけれども二人ならできる」、「一人でやるよりふたりでやるほうが成果が上がる」、「お互いに協力して取り組む」といったものがあるとの説明であった。キーワードとして、目的の共有、自主性、対等、相互理解、相乗効果、補完性などが挙げられた。

つづいて、このような「協働」を公共サービスの提供の仕組みにあてはめると、「協働推進事業」と言い換えることができるとの解説があった。これは、「市」と「市民」、「行政」と「市民活動団体」が協力することで成り立つのであり、だからこそ、市民の「ちから」が必要だという説明であった。さらに、協働推進事業の背景として少子高齢化と多様化する地域課題があり、新しい公共サービスの担い手として「市民活動団体」が不可欠だとの指摘があった。協働の具体例として、「子育て教室」と「農業ポータルサイト」の取り組みを学生が取材し、約20分間のVTRを流すことで、情報提供とした。

情報提供終了後、討議テーマをもとに、それぞれのグループでリーダーがディスカッションのヒントを活用しながら討議を進めた。最終的には、協働の現場に関われそうか、また、その条件を3つ挙げてまとめとした。その際、「身近にある協働・参加」の事例集（茅ヶ崎市の事例の一部）を配布し、議論の手助けとした。

先程と同様に、あるグループの討議について、その進行を追ってみると次のようにまとめられる。まずは、協働のイメージについて意見を出しあったところ、市のアピールであるだけではないか、身近に参加する場が少ない、それぞれの自治会の力ややる気の違いがあるという意見が挙げられた。その意見をもとに、駅近くでの活動の実施や自治会館の有効活用、施設の利用方法を市民に合わせるべきなどという、私達の要望が挙げられた。また、協働への不満足についても意見が出された。これらにより、協働への参加については、参加しづらいという方向でまとまった。

10個のキーワードとしては、「市による事前の対策不足」、「市民の巻き込みが足りない」、「変化への対応がうまくいっていない」、「市と市民との連携がうまくいっていない」、「透明性がある情報の発信を」、「市民の発信ももっと」、「市と市民との関わりたい意識にズレ」、「きっかけが足りない」、「市がサービスをするときもっと市民の立場になるべき」、「適材適所になるためのシステム作り」が挙げられた。

最後に、3つのキーワードとして、「市民としてはやる気ある」、「連携する情報発信がそれぞれ必要（何を求めているのか、何ができるのか）」、「そのためには場やきっかけが必要」が抽出され、グループとしてまとめられた。

討議終了後、リーダーにより発表が行われ、発表終了後に全体で投票を行った。各グループの発表内容と獲得ポイント数は図表3で表す。

投票終了後、グループを構成するメンバーのシャッフルをして、午後の最終討議を行った。



発表の様子



投票前に回覧する様子

図表3； 討議2における各グループの発表内容の一覧

グループ番号	各グループの発表内容	ポイント	%
1	市民も市も何を求めているのか発信すべきであり、そのためのしくみ作りが必要だ	430	20.0%
2	「共働」にすべき、税金などの背景から市民参加すべき市がパイプ役になってもらいたい	420	19.5%
3	協働の定義が分からないが、参加したい参加プロセスが重要だ	285	13.3%
4	市民の積極的な情報収集が必要だ時間や地域が参加のためには必要だ	395	18.3%
5	情報の提供があれば参加したい、市の窓口などでもっと活動の公開をすべき、活動する人間関係が重要だ	350	16.3%
6	興味・関心に合わせて参加したい	270	12.6%
	計	2150	100%

4-3. 討議3：参加や協働をもとにした彩りあるまちのイメージに関して

3回目の討議のテーマは、「参加と協働によるこれからの茅ヶ崎の彩り（望ましさ）」についてであった。市民社会パートナーズ代表の庄嶋孝広氏が情報提供をした。

情報提供の内容は、千葉県四街道市における自然環境などの魅力を活かした地域づくりや、様々な市民活動の事例を題材に、地域を盛り上げるために、みんなで力を合わせるといふ協働によって、地域を変えることが必要であるという説明であった。市民や市職員が一緒になって自発的に活動し、提案することが、地域を変える力になるというものであった。そして、そのためには、「受ける市民・もの言う市民」ではなく、「動く市民」が鍵になるという説明であった。

情報提供終了後、討議テーマをもとに、最終的には、「協働（参加）」をもとにした彩りあるまちのイメージを3つ挙げ、説明できるようにまとめた。あるグループの討議の進行を追ってみると、次のようにまとめられる。

まず、ディスカッションのヒントを参考に、茅ヶ崎のイメージについて意見抽出をした。その結果、穏やかなまち、海、湘南、自転車のまち、住みやすい、人が良いなどの意見が挙げられた。その意見をふまえて、今ある問題に話がおよんだ。たとえば、駅前が乱雑、ホームレス問題、自転車などの交通ルール・マナーの悪さが指摘され、市民のまちの望ましさがグループで共有されていった。これらにより、茅ヶ崎の将来像は、モラルやルールを守るまち、景観保護、歩行者の安全確保をすべきと要約されていった。

10個のキーワードの一部として、「景観保護」、「駅前の問題」、「顔が見えなくなってきた近所付き合い」、「子供にもよいまち」、「マナーを守る社会」、「彩りの意味がわからない」等が挙げられたものの、「実際に『参加』ということにはつながらない」という主旨の意見がグループ内で大きな関心事項となった。

3つのキーワードとして、「自然が豊か」、「交通、特に自転車の問題」、「『協働』に必ずしもつながるとは限らない」というものが挙げられ、討議がまとめられた。

討議終了後、各グループのリーダーが発表をし、発表終了後に全体で投票をした。それぞれの発表内容と投票結果は、図表4で表す。



討議風景



投票の様子

図表4； 討議3における各グループの発表内容の一覧

グループ番号	各グループの発表内容	ポイント	%
1	市民の参加と協働の必要性がわからない	160	7.7%
2	市民のニーズを拾うしくみが足りない 意見箱などの身近なしくみが必要だ	345	16.5%
3	レベルアップと積極的に参加しやすいまちの環境作りを 行政にも手助けしてもらいたい	345	16.5%
4	財産がある、のんびりした茅ヶ崎を目指すべきだ	190	9.1%
5	地元愛・茅ヶ崎スタイルの確立をすべきだ	550	26.3%
6	資源がそろっているため、市民の意識向上と効率的な 資源の活用こそが必要だ	500	23.9%
	計	2090	100%

5. 討議内容の総括

本討議会では、前述の通り、2日間で合計3回のグループ討議を実施した。そして、第1日と第2日の最後には、グループ討議全体の概要をまとめる総括をおこなった。これには、グループごとのリーダーが討議内容を報告しあった後、実行委員が討議を客観的な立場で要約し、話し合いの再度の確認をする意味も込められていた。茅ヶ崎市市民討議会実行委員長という立場から、筆者（山田）がこの総括を担当した。

5-1. 討議1の総括

討議1（第1日）の討議内容は、参加者が近所の様子やつきあい（人間関係）の変化を自由に話し合い、参加者の地域社会にたいする関係の度合いを再確認してもらう内容であった。討議の1回目から会場は熱心で真剣な議論となり、社会形成を人任せにするのではなく、多くの方々の地域社会に積極的にかかわっていきたいという思いが伝わってきた。たとえば、参加者の言葉の多くには、当該の地域を「もっとよくしたい」、「もっと快適にしたい」、「もっと安全にしたい」というニュアンスが含まれていた。そして、「もっと」という言葉の大切さが指摘された。つまり、地域の現状もそれなりにすばらしいが、さらに望ましい地域になればよいという思いが語られた。

しかし、1回目の討議ということもあり、「地域」の理解には観点のバラツキがあったことも否定できない。さらに、人々が日常用語で語る際の課題もあった。これを示す代表的な言葉は、「雰囲気」である。本来、雰囲気は、その時その場の状況を共有しなければ理解することは難しい。つまり、討議会の人々の語りは、日常生活の「暗黙の了解」を説明なしに開示していたと考えられる。もちろん、日常の語りそのものに問題があるわけではない。むしろ重要なのは、人々の言わずとも自然におこなう行動の有無、その多少、その質の差についても説明しあうことではないか。これらをふまえて、市民と行政の協働のシステム、社会の構造づくりといった形の形成、改善、改良が構想されるべきであろう。そこで、これら討議上の課題についても、翌日の討議でもひきつづき話し合いたい点が総括において説明された。

5-2. 討議2・討議3の総括

第2日におこなわれた討議2と討議3は、討議1よりも具体的に市民と行政の協働について話し合われた。討議2では、参加者に協働（参加）の身近さや必要性を尋ね、「私の課題」と「私たちの課題」の接点を探る議論から、協働のイメージを固めてもらうねらいがあった。同様に討議3では、本討議会のメインテーマにあわせ、これからの茅ヶ崎を参加と協働で彩りあるまちにするため、参加者の「望ましさ」の感覚から参加と協働によるまちの彩りを話し合ってもらった。

参加者にとって「討議会」ははじめてのことであり、さらには、ほとんどの参加者にとって一定の議論のルールに則り話し合う経験はまれなことである。実際、グループ討議中に議論がうまく進まなくなってしまうグループがあり、2日目に討議テーマが協働の核の部分に近づくにつれ、参加者は何を話したらよいか判断に困る様子も見受けられた。したがって、討議2と討議3を統合した第2日の総括ではまず、討議会という「珍しい経験」を共有できた点が指摘され、この経験そのものが茅ヶ崎の協働の今後につながる貴重な学習プロセスではないかとの説明がなされた。

社会的背景の異なる個人が協働について話し合う場で、協働や望ましさのイメージが多岐にわたるのは不思議ではない。そこで、総括の指摘の1つ目は、協働はイメージのみでは前に進めず、むしろ

望ましきという「思い」を原動力にすべきであり、こうした市民の参加を得て地域活動を前進させる力が地域を変えていくとの主旨を繰り返し説明することとなった。情報提供をしてくれた講師の説明によれば、地域社会は市民活動の熱意がより多くの人々を巻き込み、その結果、自らの課題と受けとめるようになることで確実に変化するという。地域課題の解決を誰かに任せにするのではなく、私たちの課題と考える変化が鍵といえよう。

他方で、一般の市民に何ができるか、何をしたらいいかという疑問が、わずか2日間の討議で十分に解き明かされたというわけでもない。依然として、行政への期待、すなわち行政の積極的なイニシアティブと、市民をリードする効果的な施策を定める役割がまちづくりには必要であると、参加者間で期待されたのであった。個人では解決できない課題は集合的に解決されるべきであり、これら課題が行政に委託された経緯から考えれば、やはり行政も望ましい地域社会形成の主体である。しかし、同時に、個人が社会的な存在としての市民の観点に立ち、個人の協力行動の積み上げや、市民的活動（NPOや市民活動）の意義を発言する参加者がいたのも頼もしい事実といえるだろう。

討議を通じて語られた内容をやや大雑把に解説すると、①すでに「豊か」な茅ヶ崎というまちにおいて、②市民がそれぞれの課題を取り上げ、③「私たち」の望ましき（彩り）を構築するために市民が参加・交流する可能性を読み取ることができる。したがって、地域の課題を解決したり、望ましいまちへの思いを実現したりするために、協働にもとづくまちづくりを推進する重要性については、一定の理解を得られたはずである。とくに、茅ヶ崎にたいする期待や愛情をもつ市民は多く、これがコツコツと地域を発展させるような市民行動の原動力となる点も指摘されよう。

ところで、2日目の総括の際、参加者に「この討議会が楽しかったか」、「有意義であったか」を尋ね、それぞれ挙手をしてもらう場面があった。いずれの質問においても、多くの参加者が楽しく有意義であったと答えてくれた。しかし、その一方で、楽しさが感じられなかった、有意義さも見つけられなかったという類の感想も寄せられた。こうした種類の回答の意図は、事後的に調べる必要があるが、そのヒントは事後アンケートの回答状況に見いだすこともできる。次節で事後アンケートの結果の概要を示し、本討議会の成果と課題を抽出してみたい。

6. 事後アンケートと討議会の暫定的な成果

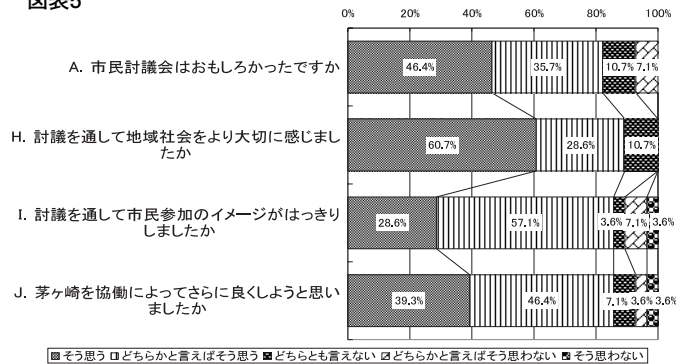
茅ヶ崎市市民討議会の実施報告をまとめるにあたり、参加者に依頼した事後アンケートの単純集計結果の抜粋をもとに、討議会の意義と成果について簡単に述べて結語としたい。

事後アンケートは、第2日の最後に会場で参加者に配布され、その場で記入・回収という方法をとった。アンケート配布31名のうち、28票が回収された。未回収票は、記入が間にあわず自宅に用紙を持ち帰った参加者から集められていないと考えられる。

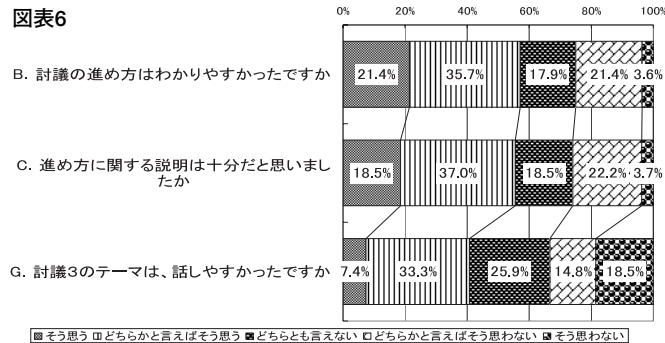
参加者が討議会をどのようにとらえたかについて、5段階で尋ねた質問をみると、「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」を加えた回答率が8割を超えたものが4つあった（図表5）。つまり、①討議会は「おもしろく」感じられ、②「地域社会の重要性」が確認され、③「市民参加」や「協働」にたいする認識が以前よりも向上したのではないかと考えられる。

その一方で、討議の進め方や説明、討議テーマの話しやすさについては運営上の課題が残った（図表6）。市民の観点にそった適切な進行方法と説明を準備し、より具体的でわかりやすいテーマ設定を心がけることで、今後も討議会開催において市民の参加動機につながる事が予想される。別の設問で、討議会参加の条件を尋ねているが、「内容・テーマ」と答えた参加者が39.3%と最も多かったこ

図表5



図表6



とから、やはりテーマ設定は重要であることがわかった。討議の内容やテーマが参加者に身近に感じられ、討議に参加すべきと感じてもらうことが継続的な討議会開催の鍵であろう。その他の配慮には、「日程」(32.1%)の工夫も必要であることが示された。他方、「案内があれば是非参加したい」と答えた参加者が32.1%おり、茅ヶ崎市民の討議会への期待、あるいは市民としての自主性と呼べるものが感じられた。

参加者が始めて経験した討議会は、参加者にも社会的経験を共有する機会であったはずである。「さまざまな世代の意見が聞ける」(71.4%)こと、「さまざまな考えが聞ける」(67.9%)ことは楽しいと感じられており、討議の重要な感想となっている。また、「茅ヶ崎市民としての連帯感」(57.1%)が生まれている点も、討議のもう一つの可能性を示している。さらに、「良好な地域づくりは個人の生活の基盤」(53.6%)と感じられ、「生活が良くなるのであれば地域について考えたい」(39.3%)という回答も多かった。したがって、「私」の課題と「私たち」の課題が、討議会を経験することでも結びつくことを意味しており、討議会後の回答として興味深い結果となった。このように、茅ヶ崎市民討議会は実態としても実験としても、一定程度以上の成果を残したと考えられる。

参考文献

篠藤明德・吉田純夫・小針憲一, 2009, 『自治を拓く市民討議会』イマジン出版
 社団法人日本青年会議所関東地区東京ブロック協議会政治行政政策委員会, 2008, 『市民討議会手引書』